

製品デザインの 心強いパートナー

名古屋工業大学 須藤正時デザイン研究室

ヘッドマウントディスプレイを用いた「音の可視化」等のテーマを研究。工学部の強みをいかしてプログラムを作り電子基板を実装したワーキングモデルづくりをおこないます。次世代の新しいデザイナーの育成を目指しています。

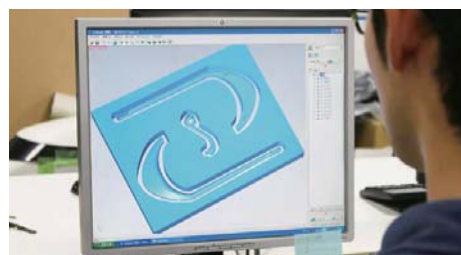


名古屋工業大学 准教授
須藤 正時 氏

須藤正時デザイン研究室では、ワーキングモデルの制作にMDX-40を活用しています。須藤氏と機器の運用をしている大学院生の山本浩司氏にお話をお聞きました。

業種	工学部第一部 建築・デザイン工学科
導入部署	須藤正時デザイン研究室
使用目的	ワーキングモデル製作
使用CADシステム	Rhinoceros

だけでなく実際に経験して覚えていく事が大事なのですが、MDX-40ならば、それを体験して学ぶ事ができます。しかも、学生が手探りで学んでいくことができます。例えば、MDX-40で刃が折れる事がありますが、「同じ材質でもこのスピードだと駄目なんだ」というのが分かるわけです。意識の高い生徒にとっては、技術を吸収する良い機械だと思います。



多彩な素材で アイデアを活かす

MDX-40を使用してもう10年になります。用途は、授業の課題から自主制作、卒業制作といろいろです。近くにライノセラが入ったパソコンを置いて、設計したものをすぐに試作できるようにしています。MDX-40は完成のイメージを想像しやすく、さまざまな素材に対応するのが良いところです。3Dプリンターも利用しているのですが、素材が樹脂に限定されてしまい、質感の確認ができません。デザイナーが自由に素材を選べるので助かっています。

ものづくりのプロセスを 学ぶことができる

建築・デザイン学部で学ぶことの一つは「ものづくりのプロセス」を理解することです。座学

学生が自主運用できる 「扱いやすさ」

機器の管理は基本的に学生に任せているのですが、自主運用できているぐらいなので扱いやすさやメンテナンスはとても良いと思います。サービスの方に来てもらうのも年に1、2回でとても少ないです。何かあって連絡するとすぐに来てくれますし、すごく丁寧ですね。来ていただいた時に「この部分をクリーニングするといいですよ」とメンテナンスのコツを教えてくださいました。購入後のアフターサービスも満足しています。

製造の現場を 理解するために有効

3Dプリンターは素晴らしい技術で研究室でも活用しているのですが、なんでも簡単に作れてしまうんですよ。量産のことを考えなくてもできてしまいます。その点、切削加工だと金型のことを自然と考えるようになります。データも考えて作らなければいけないので、すごく勉強になります。今、日本国内のものづくりの現場自体がどんどん少なくなっています。生産の現場を理解したデザイナーになって欲しいと思っていますので、MDX-40はその点でも良い教材になっています。

